『別科日本語教育』第5号（2003）

評価性副詞成分の生成をめぐって

－「－くも」・「－にも」とその周辺－

田中　寛

要　旨

話し手の総括的な主意や感情をあらわす、いわゆる文副詞はさまざまな成分から成る。ある意味では陳述副詞と重なるものであるが、そのなかに「早くも」「意外にも」などの形容詞、形容動詞連用形に「も」のついた語彙がある。これらは一部語彙的な統語構造も成し、意外性、稀少性などの情意をあらわす。様態修飾から評価、あるいは注釈へと、文そのもののレベルも異なりを見せる。本稿ではこれらのタイプの意味機能をくわしく観察しながら、事態の記述から心的な記述への転換を「も」の機能を中心に述べる。また、その周辺の文副詞句を述定のふるまいと関連付けて考察する。「くも」「にも」およびその他の副詞に「も」のついた成分や隣接する評価副詞（句）としての類型もまた話し手の主観性を強く打ち出したもので、結果誘導的な機能が顕著であること、その一部は節として拡大されること、などを考察する。

【キーワード】　評価成分　文副詞　情意性　意外性　注釈

0．はじめに

副詞の機能的な分類のなかで、文全体を修飾して評価成分となる、いわゆる文副詞にはさまざまな形式が見られる。たとえば以下のようなものである。

a）発話動詞などとともに文頭に用いて、説明的、誘導的に用いられる。動詞のテ形、条件形が用いられる。当該発言の態度をあらわす意味から発言系の副詞とも称される。

一般的に言って、率直に言って、一口に言って、大きく分けて、…

大雑把に言うと、大きく分けると、結論を言えば、それも言うなら、…

b）ある種の動詞のテ形が単独で副詞（接続詞にも転用）に転成し、文副詞としての機能をもって、しばしばある種の傾向、形勢をあらわす。複合句も多い。

総じて、概して、得てして、決まって、翻って、断じて、…

国をあげて、狙いすまして、よりによって、神に誓って、…

c）逆接をあらわす「～ながら」の語彙的な用法が評価成分として機能する。

残念ながら、遺憾ながら、はずかしながら、突然ながら、…

勝手ながら、潜越ながら、いやいやながら、われながら、…

d）形容詞、形容動詞の連用形などが文全体を修飾して評価判断するような機能を呈する。文頭にも文中にもおかれる。

めずらしく、運よく、折りよく、めでたく、

意外に（意外と）、偶然に、急に、無残に、不思議と、…

e）「～ことに」の形で、評価判断的事態を述べることがある。形容詞、形容動詞のほかにも一部の感情動詞の「た」の形にもつくことができる。

珍しいことに、惜しいことに、はずかしいことに、面目ないことに、…

残念なことに、幸運なことに、うかつなことに、不思議なことに、…

悲しむべきことに、驚くべきことに、恥ずべきことに、…

驚いたことに、困ったことに、…

f）「Nのあまり」、「あまりのNに」の形で、結果事態を誘導する成分となる。

苦痛のあまり/あまりの苦痛に、…

悔しさのあまり/あまりの悔しさに、…

我が子を想うあまり、結論を急ぎすぎたあまり、…

いずれも「非常に～ので、その結果」という意味をあらわす。前者は名詞句以外にも後接し、より広範な従属節に発展することもある。

このほかにも文副詞として機能する成分には、さまざまな語彙が個々に観察される。

g）あいにく、もちろん、当然、せっかく、わざわざ、せめて、さすが、たとえば、

実は、実際、本当のところ、いわば、要は、要するに、さいわい、やっぱり…

文副詞は文全体にかかって、発話内容に対する話し手の評価や注釈、発言の姿勢をあらわすことから、副詞のなかにあって、独立度が大きいものであるが、概観したように成分的にも単一の語彙的なものから大きな複合的単位まで多様で、意味的にどのような基準を設けるべきか、当然ながら議論の生じることになる。ここでは、d）の周縁にあると思われる「おそれ多くも」「おろかにも」のように、形容詞、形容動詞の連用形に意外性をあらわす「も」の付いた副詞類「－くも・－にも」をとりあげ、文副詞としての特徴的な機能を考察してみることにしたい。各種語彙に「も」のついたものもこれに含めて扱う。また、隣接する e）の「－ことに」、f）の「Nのあまり」、「あまりのNに」の用法についても比較検討を行う。

1.「も」の情意性

そもそも「も」については、さまざまな情意が観察され、これまでも多くの考察が加えられてきた。たとえば次のような用法である。

1）a．ひとりで10本もビールを飲んだ。

b．駅まで五分もかからない。

c．秋も深まってまいりました。

d．君も(また)しつこいな。

「10本も」の「も」は通常の予想される程度を上回る量的、質的な超過・過剰をあらわし、少なく見積もった場合の「(せいぜい) 10本は」の「は」と対極にある。「五分もかからない」は「五分とかからない」ともあらわされるが、これは反対に予想される量や程度（ここでは時間量）よりは少ない（短い）幅をあらわしている。一方、手紙文の時候挨拶などに頻用される「秋も深まり」は「も」の余情性、余韻性がもっとも強くにじみ出たもので非分析な性質をもつが、一般に“意外性の提供”と解釈される。つまり誰もが共鳴し

て想起されるであろう事柄を表現主体自らが率先して共通話題として提供するといった、一種の配慮表現として意義づけられる。「君も（また）」という言い差しも、通常考えられる人物の行動、ふるまいの規範からの逸脱を一種の感慨をこめて言いあらわしたものである。これらの「も」を他の言語成分に移し変えることは非常に困難である。日本語には表情やしぐさなどの非言語コミュニケーションが発達しなかった代わりに、こうした助詞や助動詞による細やかな心理的表現が発達しているところから、日本人にとっては以心伝心的な言語感覚も外国人日本語学習者にとっては微妙な言語文化的な発想と受けとめられ、理屈では割り切れない曖昧さにとまどうことにもなる。

一方、こうした「も」が頻用度を高めると、構文的、慣用的な用法として定着する。述部とともに、話し手の気分、感情を積極的、主体的にあらわす。

2）a．家に帰ると服を脱ぐのももどかしく、ベッドに倒れこんだ。

b．あなたなんか、顔を見るのもいや。

より人口に膾炙したものとなると、補文に直接つく情意的な言い方となってあらわれる。

3）見るも無残、聞くも涙、語るも涙、言われて名乗るもおこがましいが、

守るも攻めるも、死ぬも生きるも、言うもおろか、…

「情意」は話し手の感情と言い換えられるが、単なる感情のありかたではなく、自他ともに向かう「表出」という直観的な事態観察を特徴とする。話し手、書き手のもっとも主観的な感情、衝動の発現ということができる。

文における情意の具現は、終助詞をはじめ、一般に文末の諸形式において観察されることが多いが、これは話し手の感情をそこにもっとも統括した形で述べることが可能であるからにちがいない。一方、文末の叙述形式を予測、予期して、あるいは先取りして述べることも少なくない。評価成分もまた文の骨格（話材）の外側にあるという点では、聞き手目当ての終助詞的な機能とも関連性が見られる。「も」の発想の背景には話し手の事態に向けられる意外性（責任回避も含めて）、情緒性、過分・過少の程度に対する間接的評価、主体に対する一般通念との対比的言及など、細やかな言語的配慮がひそんでいる。

こうした「も」に共通する意味機能を詳細に記述することは、従来からの日本文法の課題であるが、日本語教育の面においても表現教育の一項として念頭におくべきであろう。誘導成分の本質的な機能は、この情意の注釈、ないし説明的な成分として意義づけられるものであるが、「－くも」「－にも」の形式もこうした詠嘆的強調をあらわす表現タイプとして位置づけられる。

2．「－くも」「－にも」の含意する情意性

4）昭和二十年三月九日、偶然にも大空襲のあった日、群馬県の空はよく晴れて、大田あたりから飛上った飛行機が北風にのってとんでいた。（平林たい子「盲中国兵」）

5）コニカが四月に設立する持ち株会社にミノルタが夏にも合流する形を検討している模様で、早ければ今月中に正式に決める。（朝日新聞2003.1.7.夕刊）

6）早くも仕切り制限時間いっぱいになりました。（相撲実況）

ここで「偶然にも」は「偶然(に)」を強調した用法と一般には説明される。「夏にも」の「にも」は「明日にも」のように時間副詞「明日」にもつき、後文の「早ければ」と呼

応して「少なくとも」という事態に対する話し手の見越し的な主観が焼き付けられている。「早くも」にいたっては、「??早く仕切り制限時間がいっぱいになりました」のように「も」を省いて言うことはできない。「も」を単に〈強調〉といった蓋然的なレベルからだけでは十分な考察をおこなったことにはならない。従来、こうした「くも」「にも」「も」の用法については森本 (1994)、西田 (1997) や, 工藤 (2000)、盧 (2001) などの考察があるが、「評価」の意義づけについてはなお議論の余地が残されている。事態目当ての評価なのか、人物に対する評価なのかという線引きも厳密には難しい。

また、係助詞の後接についていえば、

7) a. さて、出かけるとするか。
   b. さては、国へ帰ったかな。

8) a. たまに電話をかけてくる。
   b. たまには、電話でもかけてきなさい。

9) {さすが/さすがに/さすがは}横綱だね。cf.??さすがには

のように副詞類に「は」のついた用法とも比較する必要があろう。「は」をともなう用例もまた伝達的機能を有し、主意的、情意的である注1)。

「ーくも」「ーにも」の形は、描出事態を発話者が評価しつつ、かつ同時にその事態をとりたてて聞き手、読み手に向けて表出する形で述べるところに特徴が見出される。単に事態への評価成分としてのみ機能するのではなく、そこに話し手、主体の情意がいわば説明的に、あるいはナレーションのように挿入されるのである。

10) a. 彼はあつかましく部屋に上がり込んで来た。
   ; 当該主体に対する評価 ⇒ 事態目当て
   b. 彼はあつかましくも部屋に上がり込んで来た。
   ; 当該事態に対する評価 ⇒ 聞き手目当て

10) a. は当該主体、すなわち「彼」の部屋に入ってきた時の態度、姿勢をあらわすのに対し、10) b. は話し手である表現者による事態観察の結果、生じた評価内容を伝達的に述べたものと理解される。前者は行為の主体である「彼」に向けられた、いわば〈対象的評価〉で、後者は「彼があつかましく部屋に上がり込んで来た」印象全体に向けられた〈情意的評価〉といえる。

後者は、さらに不特定の聞き手、読み手である第三者に向けて、評価された事態を伝達というレベルにまで引き上げたものと認識しうる。また話し手の事態目当てから聞き手目当てへの〈二次的〉な評価というような規定が可能であろう。したがって、10) b. は10) a. にくらべて、説明的ないし回顧的な気分をあらわしている。ちなみに、文末に「というわけだ」などを添えてみると、後者のほうが、聞き手に向けて事態を統括的に誘い出し、なおかつ説明的なムードを有する文として認識されていることがわかる注2)。

11) 彼は{?あつかましく/あつかましくも}部屋に上がり込んで来たというわけだ。

あるいは、次のような複文の主文において、従属節の「にもかかわらず」と呼応的に用いられている。前件をうけながら、全体をその場の情景として意味づけるのである。

12) 母が断わったにもかかわらず、外交員はあつかましくも玄関に入り込んで来た。

そもそも「も」のこうした聞き手の関心を喚起する情意としては、否定表現と共起する

ところの、「ゆめにも」「少しも」「いささかも」「一つも」のような「も」において観察される。

13) a．最後まで選考に残るなんて、夢にも思わなかった。
b．警察の取り調べに対し、彼は少しも悪びれたところがなかった。
c．敵の攻撃にいささかもひるむ様子はなかった。
d．間違っても人にお金を貸してはならない。

「－くも」「－にも」の語彙の中には否定成分と共起するものも含まれている。その意味でもこれらの語彙表現は、共通して誘導的な性格をもっている。

さらに、「－くも」「－にも」の含意する情意には、意外性への言及が強く認められる。以下の用例も総じて、実現事態に対する話し手の意外性をあらわしている。

14) a．日頃口にしていた計画が、はしなくも社長の耳に入ってしまった。
b．進学のために戸籍謄本を取り寄せたところ、はしなくも出生の秘密を知ることになった。

「はしなくも」は一語成分とみなされるが、形態的特徴として、形容詞の連用形だけでは使えないものも少なくない。

15) a．彼の計画はもろくもついえた。(?もろく)
b．心弱くも周囲に妥協するはめになった。(?心弱く)
c．本日は賑々しくもご来場下さいまして誠にありがとうございます。(?賑々しく)
d．準次には善やんのいう意味がはっきりわからなかった。それだのに嘆かわしくも、起き上がってぼそぼそズボンをはきはじめていた。(神の道化師) (?嘆かわしく)
e．早くも仕切り制限時間いっぱいになりました。(再掲) (?早く)

15) d．のように、「それだのに」という、逆接的な状況を踏まえて連文的な構造の中で述べるところにも特徴がある。15) e．でも「まだ時間があると思っていたのに、早くも制限時間いっぱいになった」という不可避的な事態出現の経緯を含意しているのである。

一方、意外性の提示は、しばしば「余情」という効果を聞き手、読み手にもたらす。つまり後文に展開されるであろう、事態を予測するところの一種の緊張感を余情的に、あるいは誘導的に示すのである。「－くも」形式のなかには、次の「いやしくも」などのように、主として文末において固有の呼応形式をとるものがある。

16) a．いやしくも医者たるもののすべきことではない。
b．良識のある若者であれば、いやしくも良心に恥じる行為はするな。
c．いやしくも一国の総理ともあろうものが、こんな非常識なことをするとは。
d．いやしくも国会議員の身でありながら不正な賄賂を受け取ったのは許しがたい。
e．いやしくも紳士として社会に立つ以上、純正な標準語を用い、坐作進退その法にかなうように心掛けなければならぬ。(保科孝一「現代社会と国語教育」)

さらに文末述語の形態を見ると、多くが完了形「タ」であらわされる。

17) a．からくも土俵際、うっちゃりました。
b．惜しくも、優勝をとりのがした。
c．奇しくも同じ学説が同じ時期に二人の学者から提唱された。

「かしこくも」は「おそれおおくも」と同義で、古風であり、かつ特殊な尊敬の文脈で用いられる。「もったいないことに」という一種の枕詞として機能する。

18) a．かしこくも、天皇陛下よりお言葉をいただいた。

b．畏れ多くも、天皇陛下にあらせられましては、……

かつての軍国主義の時代には「かしこくも」、「おそれおおくも」の一言で、たとえ後に続くことばを発せずとも、直ちに直立不動の姿勢をとって天皇への忠誠をあらわさねばならなかった。「－くも」は、ときには精神教育的な場面にも投影されたのである。集合的な感情を極点に収斂させる働きがあり、「も」は必須成分である。「－くも」「－にも」の表現はこうした特殊な用法のほか、しばしば文語的な語調をもち、詠嘆的に用いられることがある。

19) －征く学徒、東京帝国大学以下七十七校〇〇名、これを送る学徒九十六校、実に五万名。今、大東亜決戦に当り近く入隊すべき学徒の忠尽の至誠を傾け、その決意を高揚するとともに、武運長久を祈願する出陣学徒壮行の会は、秋深き神宮外苑競技場において、雄々しくも、そしてまた健けくも展開されております…（「新聞は戦争を美化せよ！」）

アナウンサー(志村正順)の感極まって発した「雄々しくも」、「健けくも」の副詞的表現は実況中継という場を存分に利用して、不特定の聴衆を「特定」化すべく、あたかもそこに居合わせるかのような臨場感に仕立てたのである。「も」はときに歴史的な情景をも描き写した。

「－なくも」の形もいくらか数えることができる。文章語的、文語的である。

20) a．もったいなくも、本会場にお招きをいただきまして、……

b．かたじけなくも、郷土の皆様のお世話になり、……

c．はしたなくも、みっともない姿をさらけだしまして、……

d．思いがけなくも、銀座で先生ご夫妻と出遭ってしまった。

e．すると父の態度は、情けなくもぐらりとかわった。『神の道化師』

f．心なくも彼女を傷つけることになった。

g．被害者たちはそれがニセの会社であることをはしなくも知るはめになった。

「はしなくも」は「ふとした機会から」という意味である。予期しなかったことがきっかけで、という意味が共通している。これらの文脈上の特徴は、結果事態のいわば情意的確認ともいえるもので、多くが従属節の「て」節を背後に（前件に）もちながら、主文は多くが「(てしまっ）た」の形式で示される。これも「－くも」「－にも」の情意的な特徴を示しているといえよう。

なお、「－くも」のなかには、副詞的な用法を装いながら、接続（逆接）の機能をはたすものがある。

21) a．はかなくも沖縄戦に散った女学生たち。

b．はかなくも、美しく燃え。(映画のタイトル)

21) a．は文副詞であるが、21) b．は「はかなく、しかも」という構造である。

22) 勇ましくも過激なスローガンは空疎になり、無力感やら敗北感やらが学生大衆の間に漂いはじめていた。(光の雨)

「勇ましく、かつ過激な」という、並列表現であることが弁別の目安である。一方、

23) a．苦しくも、強く生きていたい。；苦しくても、…
　　b．貧しくも、清く暮らしていく。；貧しくても、…
　　c．せつなくも、情緒溢れる作品。；せつないが、…

のように、逆接ないし譲歩の意味をあらわす。「貧しくとも」などのように「とも」の形にもなりうる。「Xではあるが、一方Yである」といった、類似的で、かつ対比的状況が差し出されている。「Xのような状況下においても、ほかでもなくYを擁護する」といった姿勢があらわされている。こうした用法は形容詞連用形に「も」のついた形に多く見られ、次に検討する形容動詞のタイプ「－にも」には今回、見いだすことはできなかった。

3．形容動詞連用形、その他の成分につく「も」

以上は形容詞連用形の一部に「も」がつく例であったが、形容動詞の連用形にも同様の現象がいくつか観察される。以下、椎名麟三『神の道化師』から用例をみてみよう。

24) 準次は、滑稽にも涙をこぼした。
25) だが、残念にも、その手は一層汚れていて、彼は処置に窮した思いだった。
26) それがわかったのは、うかつにも別居して数年後の彼が中学の二年のころであったが、
27) その彼は、おろかにも家出を重大な犯罪と考えていたことはたしかであった。
28) 準次は、あわれにもう一歩も歩けないほど疲労困憊していた。

文末に「のだ」があらわれるのも、これがもつ説明のムードという特徴をあらわしている。

29) 彼は傲慢にもこの宿泊所の人々を少しも信用していなかったのだ。
30) 彼自身の陋劣な行為のために、不当にも窓のない記憶の牢獄へ閉じ込められていたのである。

このほかにも「みじめにも」「意外にも」「不当にも」「偶然にも」「無残にも」「かりそめにも」「皮肉にも」などがある。同様に「も」は必須成分である。

31)　登戸製ラジオゾンデの技術は皮肉にも、戦後のアメリカの気象観測技術を飛躍的に向上させることになった。
32) もしかすると、別れる時に「長いことお世話になりました」と、きまり文句ともいうべき言葉を口にしたが、それは本心から発したもので、これ以上迷惑をかけてはならぬと殊勝にも思ったのかも知れない。(「メロンと鳩」)
33) 部屋があるかしらと泰之が危ぶむと、店主は親切にもその場で電話を渓山荘にかけ、部屋の都合はできると向うの返事を伝えてくれた。(「神々の乱心」上)

ここで、「親切に」と「親切にも」を例に比較してみよう。

34) a．　親切に道を教えてくれた。　　【様態】
　　b．　親切にも道を教えてくれた。　【評価】

「親切に」は話し手の感情を交えずに客観的に事実を述べたものであるが、「親切にも」のほうは結果から見た、いわば後発的な全体的印象の評価である。「予想だにしなかったことだが」という意外性が強くあらわされている。以下も同例である。

35) a．千代の富士は大関を豪快に上手投げでしとめた。　【様態】
　　b．彼は豪快にも一升瓶を一気に飲んでしまった。　【評価】

「こしゃく（な）」は通常「にも」の形によってしか副詞としては機能しない。

36) a．こしゃくにも、小娘は素手でかかってきた。
　　?b．こしゃくに大人をバカにするとは。cf. 大人をバカにするとはこしゃくな。

ここで形容動詞の「に」と「にも」形の分布について瞥見しておくと、「くも」の場合は「もろく壊れる」「はかなく消える」などのように双方が可能であったが、「に」の形のままでは用いにくいものが比較的多い。それだけこれらの語彙性は高いといえよう。ここで「に」「にも」の分布について分類を試みる。

【「に」「にも」の形をもつもの】
親切に(も)、無残に(も)、偶然に(も)、うかつに(も)、強引に(も)、豪快に(も)、…
【「にも」の形しかもたないもの】
みじめにも、皮肉にも、傲慢にも、おろかにも、滑稽にも、残念にも、あわれにも、こしゃくにも、生意気にも…
【「に」の形しかもたないもの】注3)
静かに、賑やかに、だてに、好きに、まじめに、神妙に、…

さらに、対象を形容動詞成分以外にも拡充して観察を続ける。

「いみじくも」は、文語形容詞「いみじ」の連用形に係助詞「も」との複合形で、「まことによく」「適切に」「巧みに」の意味をあらわしながら、誘導的な成分ともなっている。

37) a．この本はいみじくも日本人の性格を言い表す結果ともなっている。
　　b．いみじくも教育委員会委員長ともあろうものが、とんでもない失態をしでかして、
　　c．狭くて粗末な日本人の住宅をウサギ小屋とはいみじくも呼んだものだ。

指示詞「こんなに」「そんなに」「あんなに」にも「も」がついて、話し手の強い衝動や感慨（落胆）などがあらわされる。

38) a．こんなにもあなたを愛しているのに、どうして別れるの。
　　b．あんなにも人の命がはかないとは。
　　c．あれほどまでにも、努力したことが水の泡になった。

「－にも」にも「－くも」同様、一部に否定述語との呼応が見られる。

39) a．かりそめにも（リーダーともあろうものが）嘘をついてはならない。
　　b．間違っても隙をみせてはならない。

上記用例ではマイナス評価が多勢を占めるが、プラス評価もないわけではない。

40) a．幸運にも、社長の娘に見そめられた。　cf.??幸運に
　　b．不運にも、事故に巻き込まれてしまった。cf.??不運に

「幸い」は特殊な副詞的形態を有している。「幸いに」という副詞は一般に用いられない。

41) a．雨が降り出したが、幸い、タクシーが通りかかったので助かった。

b．財布を落として困っていたが、幸いにして友人が拾って届けてくれた。
c．追突事故に巻き込まれたが、幸いにもけがはなかった。
d．母が旅行にいったのを幸い、彼は恋人を部屋に泊まらせた。
e．先生が病気で休んだので、これ幸いとばかり、みんなで外へ出て遊んだ。
f．今年の修学旅行は幸いなことに天気にめぐまれ、とても楽しかった。

否定の「ず」の形に「も」がついた「－ずも」の形もいくつか見られる。

42）a．二人の意見ははからずも一致した。（偶然にも）
b．はからずも委員長という大役をおおせつかって、いささか戸惑っている。
43）一度ならずも、人前で酔態をさらけだしてしまった。
44）私の行為が心ならずも妻を苦しめることになってしまった。

ところで、先にある種の形容詞、形容動詞と限定したが、それは具体的にどのようなタイプの形容詞、形容動詞をさすのであろうか。これまで述べてきた用例から類推すれば、「情意」とも関係して、感情をあらわす形容詞、形容動詞ということになる。くわえて、発生事態に対してプラス・マイナスの評価をくだす形容詞、形容動詞があげられる。「みじめにも」などは前者に、「早くも」などは後者に属するだろう。

こうした「も」の情意性は、不特定多数者である聞き手、読み手である第三者への喫緊な伝達意図を背景に、報道文などにも多用される。聞き手の関心や耳目をあつめる際の、呼び水的な役割をになう。

45）a．今週中にも国会で審議される見通し。
b．今晩遅くにも決定される予定。
c．来月早々にも判決が出る運びになった。
d．台風は明日にも上陸しそうです。

これらは「に」がつく時間副詞に「も」が、「に」がつかない時間副詞に「にも」がついたものである。予定の期日が早まって実現される見通しにある事柄を述べるのが特徴である。話し手の発話時点から比較的はなれた時間を要するのが普通で、ごく近い把握可能な時刻などについては使いにくい（＊「彼は一時にも目的地に着いた」）。

このほか、「死んでも」「間違っても」のような「ても」の固定的な用法がある。

46）a．死んでお詫びしますという遺書を残し、自殺。　様態副詞（附帯修飾）
b．死んでもうそは申しませんと言いながら、　文副詞（文修飾）
47）a．間違って電話してしまった。　様態修飾（附帯修飾）
b．間違っても人前で愚痴を言ってはならない。　文副詞（文修飾）

形容詞の「くても」の形は「せいぜい」という目分量を含意する。

48）a．早くても1時には到着する予定。；早くとも
b．少なくても500人集まれば十分だ。；少なくとも

4．語彙資料：「よく」と「よくも」など

もともと副詞の形のものに、「も」がついた副詞とがペアをなしているかのような例をいくつかみることができる。ここでは代表例をあげて意味的な違いを観察してみよう。頻度、程度、様態をあらわす副詞が「も」をともなうことで評価副詞として機能している。

A【基本的意味は不変、強調】
あくまで／あくまでも、たったいま／たったいまも、ともかく／ともかくも、
すぐに／すぐにも、また／またも（や）、
B【意味的な分別のあるもの】
いかに／いかにも、いずれ／いずれも、すこし／すこしも、どうして／どうしても、
ひとつ／ひとつも、ゆめに／ゆめにも、どう／どうも、
C【対応形をもたない独自のもの】
いやがうえにも、いやがおうにも、かえすがえすも、またしても、くれぐれも、

Aはいずれもそれぞれほぼ同じ意味、同じニュアンスをあらわしている。次にBの「文中において後者が不完全である場合」を見ると、このケースのほうが多く見られる。以下、いくつかの比較例を見ていきたい。

【よく・よくも】
49）a．{よく/よくも}そんなことができますね。
b．{#よく/よくも}大切なものを壊してくれたわね。
「よく」は単に「十分」「頻繁に」という意味であるが、「よくも」は予想以上に、という局面を意図的に表明したものである。
【早く・早くも】
50）a．予定より早く着いたが誰もいなかった。
b．ビッグニュースを早くも聞きつけたマスコミ関係者が外で待機している。
「早く」は単に比較の程度を、「早くも」はまだそんな時期ではないと思っているのに、すでにその時期が迫ってきている、という切迫した意味をあらわす。
【勇敢に・勇敢にも】
51）青年は{勇敢に/勇敢にも}素手で悪漢に立ち向かった。
いずれも基本的にはほぼ同様の意味をあらわしているが、「勇敢に」が様態、「勇敢にも」が評価をあらわす。後者は「勇敢にも…向かっていった」のような情意をあらわしている。
【強引に・強引にも】
52）無理な体勢から{強引に/強引にも}小手投げにいったのが敗因だ。
51）の例と同様の関係である。
【大胆に・大胆にも】
53)??a．彼女は大胆に会場に二時間も遅れてきた。（；??遅れてきたのは大胆だ）
b．彼女は大胆にも会場に二時間も遅れてきた。（；遅れてくるとは大胆だ）
53）a．は事実本位に述べるところに特徴があるが、53）b．は発話背景として重要な会議、正式なパーティーの席にもかかわらず、などのような場にそぐわない違和感を背景に、いわば衆知の事実のように言うところに特徴がある。
【意外に・意外と・意外にも】
54）a．{意外に／意外と}面白い映画だった。
b．行ってみたら{意外にも/*意外とも}仲間がいた。

「意外に」「意外と」は「割に」「割と」のように思ったよりという単なる予想との比較であるが、「意外にも」は発見の驚きが強い。

【唐突に・唐突にも】

55) a．唐突に聞かれても、とっさに返答ができるものではない。

b．彼は唐突にも社長に直訴していったということだ。

54) の例と同様の関係をなしている。

【傲慢に・傲慢にも】

56) a．あいつは人前でいつも傲慢にふるまう。

b．あいつは傲慢にも人前で私を顎で使った。

これも様態と評価の関係にある。以下も同様である。

【強情に・強情にも】

57) a．彼女はいくら問いただしても強情に口を閉ざしたままだった。

b．彼女は強情にもどんな制裁をあたえても白状しようとしなかった。

【うかつに・うかつにも】

58) a．怪我をする場合があるので、うかつに（は） 手出ししないほうがよい。

b．四人でかかっていけば、いかに彼といえどもうかつに（は）向かってこれないだろう。

c．うかつにも私はその日の約束をすっかり忘れていた。

「うかつに」は「むやみに」「やみくもに」という様態をあらわす。「うかつにも」は行為全体への評価をあらわす。形容詞以外のものもあげてみよう。

【いかに・いかにも】

59) a．いかにたいへんだったか、君には分からないだろう。

b．妻はいかにも疲れたという表情で帰ってきた。

「いかに」は程度、「いかにも」は「疲れたような」という様態と共起するもので、元来異なる成分である。

【ともかく・ともかくも】

60) {ともかく/ともかくも}医者に見せた方がいい。

ほとんど差異は見られない。「とにかく」に対して「とにかくに」は語彙としては用いられない。

【あくまで・あくまでも】

61) a．{あくまで/あくまでも}シラをきる。

b．写真に写る現象は{あくまで/あくまでも}現実そのものだ。

c．空は{?あくまで/あくまでも}青く澄み切っていた。

基本的にいずれも同様の機能を呈しているが、「あくまでも」のほうが主観的である。

【いずれ・いずれも】

62) a．いずれ、お目にかかったうえで、話しましょう。

b．いずれも私の想像した人物とは異なっていた。

「いずれ」は「いつか」という不定詞、「いずれも」は「双方」「どちらも」という意味で、元来意味的に異なる成分である。

【もし・もしも】

63) a．もし、明日雨が降ったら、出かけるのをやめよう。

b．もしも私が家を建てたなら、小さな家を建てたでしょう。

c．もしものことがあったら、電話をください。cf.*もしのことがあったら、

「もし」は将来起こりうることの一つをとりあげて言うことをあらわすのに対し、「もしも」は「もし」を強めながらも、「万一の」という意味で一歩踏み込んで、起こってはならない事態を予測して言う。

【すぐに・すぐにも】

64) a．電話をしたら、すぐに駆けつけた。cf.??すぐにも

b．電話をかければ、{すぐにでも/すぐにも}参上します。

c．すぐにも救援隊を派遣する用意がある。cf.?すぐに

「すぐに」は命令に使えるが、「すぐにも」は使いにくい。

65) a．すぐにうかがえ。

b．?すぐにもうかがえ。

【あれで・あれでも】

66) a．あれで大学教授とは笑わせる。

b．あれでも精一杯頑張っているんだから、分ってやれよ。

【今に・今にも】

67) a．今に分かると思うよ。

b．今にも押しつぶされるかと思った。

68) a．今に先生に叱られるぞ。

b．??今にも先生に叱られるぞ。

69) a．今に見ていろ、僕だって。

b．??今にも見ていろ、僕だって。

70) a．??今に雨が降りそうだ。

b．今にも雨が降りそうだ。

前者は終助詞とも呼応し、警告をあらわす。後者は様態助動詞「そうだ」などと共起する副詞である。「今に」は「現在はその時期ではないが、近い将来必ず実現する時が来る」、というような主観的な観察にもとづいて用いられるのに対して、「今にも」は「もう少しでそういう状態が実現するという客観的な情勢にあることを述べる。

【まちがって・まちがっても】

71) a．まちがって赤いボタンを押してしまった。

b．まちがっても赤いボタンを押してはならない。

「まちがって」は様態修飾であるが、「まちがっても」は「絶対に」という否定と呼応する副詞成分である。前述の【死んで・死んでも】の意味的関係も同様である。

【かりに・かりにも(かりそめにも)】

72) a．かりにぼくが君だったら、どうしますか。

b．{かりにも/かりそめにも}親ならそんなことを口にしてはならない。

c．かりにもどんなことがあっても、恩を忘れてはならない。

d．試合に負けるようなことがかりにもあってはならない。

e．かりにも国会議員であるからには、品位をもっと心がけるべきだ。

「かりにも」には、「事実であろうとなかろうと、そうあってほしくない事柄を禁止する気持ち」をあらわす。また、「語の真の意味では、それにふさわしくない者としても」という意味である。「かりにも～である以上」などの定型が見られる。「かりそめ」は文語的な表現である。

【まがりなりに・まがりなりにも】

73）a．まがりなりに目的地に到着することができた。

b．まがりなりにも言われる通りにやってきたのだ。

前者は「どうにか」の意味だが、聞き手に結果を表明するような後者の場合は、「のだ」をともなって、「まがりなりにも」がふさわしい。

【なお・なおも】

74）a．なお、締切日は明後日消印まで有効です。cf.*なおも

b．なおも上手をとったままです。

「なお」は接続詞としても用いられるが、「なおも」は「いまだに」の副詞を強調した意味しか、もたない。

【何より・何よりも】

75）a．無事でいてくれて何よりです。

b．何よりも無事でいてくれてうれしい。

いずれも「一番」の意味だが、「何よりも」のほうがより統括的である。

【－ながら・－ながらも】

76）??a．貧しいながら明るい家族、

b．貧しいながらも明るい家族

77）a．知っていながら知らないそぶり。

?b．知っていながらも知らないそぶり。

「ながら」は逆接をあらわすが、慣用的な使用制限も見られる。

5．「－ことに」との相関

「惜しくも⇔惜しいことに」「無残にも⇔無残なことに」のように「－くも・－にも」が「－ことに」形式に置き換えられるものと、「からくも⇔*からいことに」、「不当にも⇔?不当なことに」のように「－ことに」形式に置き換えられないものとがある。前者を（A類）、後者は（B類）としよう。ここでは、こうした二つの表現の互換性について考察するために、前節であげた「－くも」「－にも」の表現と合わせて分類してみよう。

A類（「－ことに」形式と言い換え可）

残念にも、おろかにも、みじめにも、うかつにも、滑稽にも、不当にも、あわれにも、はかなくも、おそれおおくも、もったいなくも、かたじけなくも、ご苦労にも、幸運にも、不運にも、いまいましくも、…

B類（「－ことに」形式と言い換え不可）

早くも、からくも、雄々しくも、強引にも、かしこくも、はしなくも、いみじくも、…

C類（「－ことに」形式だけをもつ場合）

あいにくなことに、困ったことに、驚いたことに、嘆かわしいことに、見苦しいことに、なつかしいことに、不思議なことに、奇妙なことに、大変なことに、情けないことに、のっぴきならないことに、情けないことに、たのもしいことに、心外なことに、…

この区分の原則、規則の特定化は現時点では困難である。文法化した「－ことに」の形式が生産的な傾向を見せるのに対して、「－くも」「－にも」の形式はむしろ個別的である。

では、「－くも」「－にも」と「－ことに」の本質的な違いはどこに認められるのだろうか。一つは、「－くも」「－にも」の形式が臨場的、瞬発的に発せられるのに対し、「－ことに」には事態発生のあと、やや時間をおいて規定するといった、内省的な観察が内在しているように思われる。「－くも」「－にも」が眼前事態、または近似的未来・現在の事態といった、話し手、聞き手にとっての共有すべき話題が身近にある場合にあらわれやすく、「－ことに」はむしろ起こってしまった結果的事態に対する言及であるといってもよい。つまり形容修飾にあたって、タイムラグ（時間的なずれ）が認められる。

78）a．惜しくも優勝をのがしてしまった。　……事態発生から近い時点

b．惜しいことに優勝をのがしてしまった。　……事態発生から離れた時点

「惜しくも」の文は、現場的である。「－ことに」はいまだ興奮さめやらぬときには使いづらいのではないだろうか。たとえば、選手へのインタビューで、

79）a．惜しくも優勝をのがしてしまいました$\boxed{ね}$。

b．惜しいことに優勝をのがしてしまいました$\boxed{ね}$。

79）a．のように聞くのは自然であるが、「惜しいことに」と言ったのでは、すでに周囲の評価がそのように定まっているかのような錯覚をあたえ、むしろ当事者に抵抗を生じさせるのではないだろうか。前者は詠嘆的、後者は内省的である。聞き手に働きかけるように文末に「ね」などを添えて言う場合、「－ことに」においてはやや適切性を欠く。「－ことに」には“時間的なずれ”を背景に、多勢の評価が「容認される」という前提を見越して述べているのである。ここからも「－くも」「－にも」は発話的（口頭語的）、「－ことに」は叙述的（書面語的）な性格が観察される。

このように、「－ことに」の形式はいわば結果事態を発話時点において対象化して評価するもので、「－もので」との比較において、内省的な注釈成分となる（田中1999）。事態発生の現況をふまえて、あえて意味付けをはかるのである。

80）a．奇妙なことに、さっきここにあった鍵がない。

（；さっきここに置いたはずの鍵がない。奇妙なことだ。）

b．正直なもので、子供はちゃんと覚えている。

（；子どもはちゃんと覚えている。正直なものだ。）

いずれも結果事態の評定を先取りした注釈表現となっている。

もう一点、「－ことに」の用法の特色について述べると、これらの文副詞は以下に述べる内容事態にかかわる評価、判断の諸相を述べることから、しばしば述語成分として文末に移行される。つまり、ひとつの完結した事態として規定、容認されることになる注4）。

81）a．くやしいことに、一点差で負けてしまった。

：一点差で負けてしまったのはくやしい（ことだ）。

b．まことに運がいいことには、先方から助け舟を出してくれた。

：先方から助け舟を出してくれたのはまことに運がよかった。

c．あいにくなことに、列車は出発したあとだった。

：列車が出発したあとだったのはあいにくなことだった。

82）{幸運にも/幸運なことに}、雨も小降りになってきた。

：雨も小降りになってきたのは幸運なことだった。

83）残念なことに、私が訪ねてきたときは、その人はもう引っ越したあとだった。

：私が訪ねてきたときにその人がもう引っ越したあとだったのは残念なことだった。

以下の例も、いくぶん不自然さは残しながらも、話し手の「感慨」として、文末的な叙述形式に移行される可能性を含んでいる。

84）a．面白いことに、私がいま教えている学生は私が昔お世話になった先生の子供さんだ。

b．なつかしいことに、集まった人のなかには小学校の同級生もいた。

c．運が悪いことに、店にいた客の大半が煙に包まれて窒息死した。

d．見苦しいことに、二人は会えば必ず人前で口げんかする。

e．嘆かわしいことに、今回も彼の意見は採択されなかった。

f．ごくろうなことに、初めからやり直すことになった。

いずれも事態描写である。伝達的な表出では次のように言う必要がある。

85）人前で喧嘩するような、見苦しいことはするな。

86）はじめからやりなおす{なんて／とは}、ごくろうだな。

これに対して、「－くも」「－にも」形式のうち、「－ことに」との代替が許容されにくいものは、一般に文末形式への移行はできない。

87）おそれ多くも会長から招聘のお声がかかった。

：??大先生から招聘のお声がかかったのはおそれ多い。

話し手の姿勢にふれておくと、「－ことに」は「－そうだ」で結果事態があらわされるが、「－くも」「－にも」ではそれができる場合とできない場合がある。

88）a．嬉しいことに、来月から給料が上がりそうだ。

b．こまったことに、一悶着起きそうなんだ。

89）??a．からくもこのまま逃げ切りそうだ。

b．無残にも壁がくずれ落ちそうな建物。

つまり、「－ことに」は「－ことには」の主題化を担いつつも、将来の予測的なことも含意することができるのに対し、「－くも」「－にも」は現時点（発話時点）での評価対象に限られている。また、「－ことに」には「は」がついて、もともと「こと」によって事実化された事態を主題化して述べることがある。

90）（早起きしたにもかかわらず）嘆かわしいことには、朝から一匹も釣れていない。

また「－ことに」には自発的な感慨をも言い含めることができる。「－べきことに」といった自己容認的な評価である。「[V べきこと]の一つに[X]がある」という提示文の類型でもある。これには、「悲しむべきことに」「驚くべきことに」「惜しむべきことに」「恥ず

べきことに」などが比較的よく使われるフレーズがある注5)。

91）さらに驚くべきことには、これまでにも多くも不祥事が隠蔽されていたという。

6．注釈から評価へ

6．1．「－だが」と「－ことに」

田中（2000）では文頭の注釈成分が文副詞相当の機能をもつ例として、次のような例をあげた。一様に評価成分をなし、ある種の後件を誘導するような機能を呈している。

92）a．あいにくですが、課長はいま席をはずしております。
　　b．失礼ですが、どちらさまですか。
　　c．残念ですが、また出なおします。
　　d．お恥ずかしい次第ですが、明日急いで発送いたします。
　　e．お気の毒ですが、ただいま息を引きとられました。
　　f．信じがたいことですが、…お宅のご主人が遺体で発見されまして。
　　g．憎らしいが、相手チームの攻撃力にはかなわない。
　　h．くどいようだが、あいつのことは信用するな。
　　i．つらいだろうが、ここは黙って引き受けてくれ。

これらの特徴的なことは、誘導成分だけで、十分にこと足りるという点である。

93）失礼ですが……、残念ですが……、お気の毒ですが……、

これらはほぼ「－ことに」に置き換えることはできるが、後に続く文のレベルは異なる。

94）a．あいにくなことに、訪ねた先は引っ越した後だった。
　　?b．あいにくなことに、課長はいま席をはずしております。cf. あいにくですが、

95）a．失礼なことに、彼は挨拶もしなかった。
　　??b．失礼なことに、どちらさまですか。cf. 失礼ですが、

96）a．残念なことに、1点差で負けてしまった。
　　??b．残念なことに、また出なおします。cf. 残念ですが、

「ことに」は対人的、伝達的には用いられにくい。質問文や挨拶表現として不適なのはそのためである。だが、例外もある。

97）a．お恥ずかしいことに、息子がまたご迷惑をかけまして。
　　??b．お恥ずかしいことに、明日急いで発送いたします。

この場合は、むしろ事実描写には適せず、対人的関係において成立している。主体の意志的な表明には用いられない。また、

98）a．困ったことに、お宅のお子さんが万引きをしましてね。
　　b．困ったことに、今晩、残業が入ってしまった。

のように事実本位の描写も対人伝達的な描写も成立することもある。さらにこの場合は、「ことですが」の形で注釈的に言い差すことができる。

99）a．困ったことですが、お宅のお子さんが万引きをしましてね。
　　b．困ったことになったが、今晩、残業が入ってしまった。

「ことだが」「ことになったが」は余情的な用法で、省略が可能である。これに対して「－ことに」ははっきりとした評価づけを行っている。

6．2.「－ところ」「－ところで」「－もので」

形式名詞をともなう評価成分として、「ところ」は一種の独立した文副詞としての機能をそなえている。語彙的にはいくつかの用法に限られている。

100) 正直なところ、勝つとは思っていなかった。cf. *正直なことに、*正直にも

これは「(正直な) ところを言えば」という一種の条件句で、「ところ」は思考、判断の起点とされる。101) のように、働きかけの文がくることもある。

101)せっかくのところ、お引取り願えませんでしょうか。

102) a．本当のところ、私はあの人のこと、嫌いなんです。cf. *本当なことに、*本当にも

b．実際のところ、成功できるかどうかは未知数だ。

c．一見したところ、欠点はないように思える。

d．私の見るところ（では)、今回の戦争は避けられそうにない。

こうした評価成分は「ところ」節（「たら」「と」条件節にも類似する）に拡張される。より意外性を強調した「ところが」も併用される。

103)電話をかけてみたところ（が)、聞き慣れない女性の声が出た。

これに対し、「ところで」はある段階、時点において、事態の出現の可否を述べるものである。これもいくつかのフレーズであらわされる。

104) a．惜しいところで、試合に負けてしまった。

b．意外なところで、ミスを出してしまった。

c．寸でのところで、事故に巻き込まれるところだった。

「もので」による評価価値判断はさらに敷衍的で、経験的な事態を確認して用いられる。

105) a．おかしなもので、酒を飲んだ後は食欲がある。　cf. おかしなことに

b．妙なもので、忘れているときに注文が来るんです。　cf. 妙なことに

c．困ったもので、兄は昔から酒癖が悪いんです。　cf. 困ったことに

「こと」の臨時的、個別的、「もの」の普遍的、本質的、「ところ」の状況的、といった本来形式名詞のもつ性質と関係があり、興味深い。

7．「Nのあまり」「あまりのNに」との相関

ここでは、「－くも」「－にも」と類義的な関係にあるものとして、「Nのあまり」「あまりのNに」の用法についてみておきたい。

そもそも「あまり」の意味は、「喜怒哀楽などの感情や、特殊な心身の状態を抑えることが出来ない様子」をあらわす（『新明解国語辞典』第五版)。

106) a．それはあんまりだ。あんまりな話だ。

b．{あまりに/あまりにも}忙しくて、ご飯も食べられない。

「あまり」は「勢いあまって」のように、つい、規定量を超過してしまうような事態をあらわし、不可避な結果事態を形式名詞として用いられると、その機能としてはほぼ「～しすぎた結果」という意味をあらわす。「形容できないくらい」「改めて言及する必要もないほどに」といった、一種の強調表現である注6)。

7．1．「Nのあまり」

「－さのあまり」の形は一つの典型である。感情形容詞（形容動詞）が多くあらわれる。

107）なつかしさのあまり、くやしさのあまり、さびしさのあまり、熱心さのあまり、うれしさのあまり、かなしさのあまり…

「－みのあまり」も同様に見られるが、数は少ない。

108）a．悲しみのあまり、言葉も出なかった。
　　b．憎しみのあまり、とっさにつっかかるところだった。

漢語動詞を主にして、名詞を感情の誘因としたものもある。

109）感激のあまり、心配のあまり、心労のあまり、傷心のあまり、勢いのあまり、怒りのあまり、興奮のあまり、ショックのあまり、……

「あまり」の前接部分には名詞のほかに動詞成分もあらわれる。一つは基本形である。

110）a．勝ちを急ぐあまり、雑なプレーが目につく。
　　b．周囲の視線を意識しすぎるあまり、日頃の実力を発揮できない。
　　c．焦るあまり、味方への正確なパスができない。
　　d．我が子を想うあまり、母はついに寝込んでしまった。
　　e．勝ち負けにこだわるあまり、スポーツの醍醐味が損なわれている。
　　f．肩車をきらうあまり、引き手がなかなかとれない。（柔道の試合で）

基本形に接続する場合は「つい」という過失や傾向の意味合いが強いが、「た」形にも接続が可能な場合もある。

111）a．問題は簡単だったのに、いろいろ考えすぎたあまり、間違えてしまった。
　　b．態度が出すぎたあまり、相手を不愉快にさせてしまった。
　　c．早く着きすぎたあまり、近くの喫茶店で1時間近く待つことになった。

前件の事態が後件の事態を引き起こしてしまう、という過失的な意味をあらわしている。基本形接続の場合とくらべて、確定的な事態が提示され、一般に過剰の意味をともなう。

7．2．「あまりのNに」

一方、「あまりのNに」の形も同様に、程度を背景にした因果関係をあらわす。

112）a．あまりの練習の厳しさに、辞めて行く部員があとを絶たなかった。
　　b．母親のあまりの優しい励ましに、思わず涙が込み上げてきた。
　　c．あまりの懐かしさに、ことばを失ってしまった。
　　d．あまりの寒さに、吐く息が真っ白く見えた。

ここで「Nのあまり」との交替をみると、感情的な起伏は許容されるが、複数の修飾をもつ場合や、感覚的な「寒さのあまり」などは不自然な文になる。

113）??a．練習の厳しさのあまり、……
　　??b．母親の励ましの優しさのあまり、……
　　c．懐かしさのあまり、……
　　?d．寒さのあまり、……

「あまりのNに」の名詞には、形容詞、形容動詞に「さ」のついた形であらわれることが多いが、一部の名詞が代行する場合もある。

114)あまりの強引さに、あまりの悲惨さに、あまりの不自然さに、あまりの唐突さに、あまりの滑稽さに、あまりの実直さに、あまりの熱心さに、…

115)あまりの突然に、あまりの酷さに、あまりの出来事に、あまりの勢いに、あまりの仕打ちに、あまりの惨状に、あまりの剣幕に、あまりの喜びに、あまりの驚きに、…

「あまりの－ように」「あまりの－ぶりに（は）」の形も数例見られる。

116) a．あまりの部屋の散らかしように、足の踏み場もなかった。

b．夫のあまりの変わり果てように、妻は半狂乱になった。

c．乗客のあまりの悪態ぶりに、あいた口がふさがらなかった。

d．学生のあまりの傍若無人ぶりには、さすがの教授も愛想をつかしてしまった。

e．あちこちに誤字があって、あまりのずさんな編集ぶりにはあきれてしまった。

7．3．「Nのあまり」「あまりのNに」と「－ことに」

「Nのあまり」は「あまりのN」と比較して、節への拡大が許容されること、一方、「あまりの」は114)，115）のように、きまった表現が多く見られる点がきわだっている。「あまりのNに」は文副詞としての独立した性格が強く、節への展開ができない。「Nのあまり」は「に」は一般につかないが、「あまりのNに」の「に」は必須である。この「に」は「に対して」「によって」という対格、起因格としての意味を有しているからである注7)。

「Nのあまり」と「あまりのNに」は原理的には同じ趣旨をあらわしてはいるが、前者のほうがむしろ後件の結果に意味の比重がおかれ、後者はむしろ前件が後件の結果事態を到来させる要因を強調する傾向がある。たとえば次のように比較してみると、「Nのあまり」の文はいくぶん不自然さをともなう。

117) a．コーチのあまりの厳しさに、やめて行く部員があとを絶たない。

?b．コーチの厳しさのあまり、やめて行く部員があとを絶たない。

；コーチが厳しすぎるあまり、やめて行く部員があとを絶たない。

これは、後件の結果事態に（情報の）重きをおいた表現であることから、前件を強調した「Nのあまり」と意味的なバランスを損なうためと思われる。

118） a．今年の夏はあまりの暑さに、何をする気にもなれなかった。

?? b．今年の夏は暑さのあまり、何をする気にもなれなかった。

また、「Nのあまり」は前方に何らかの当該事態に関係する情報がなければ、唐突な感じが残ってしまう。倒置文も「Nのあまり」は成立しにくい。

119) a．何をする気にもなれなかったのはあまりの暑さのせいだった。

?b．何をする気にもなれなかったのは暑さのあまりのせいだった。

比較してもわかるように、「あまりのNに」のほうが使用範囲は広い。これは文副詞としての簡潔さが要求されるからでもあろう。「Nのあまり」は節への発展的要素を有しているので、後件との因果関係が意識される。

120) a．あまりの突然に、どう対応してよいか戸惑った。

?b．突然のあまり、どう対応してよいか戸惑った。

121) a．彼の発言のあまりの強引さに、周囲の者もあっけにとられた。

?b．彼の発言の強引さのあまり、周囲の者もあっけにとられた。

122) a．あまりの忙しさに、手紙を書くひまもない。

?b．忙しさのあまり、手紙を書くひまもない。

「Nのあまり」は一般に文としてのすわりはよくないが、一方、次のような複文においては、むしろ「Nのあまり」のほうがすわりがよいようである。これも、「Nのあまり」の名詞成分が、前方に位置する既情報としての事態と意味的に密接な関係を有しているからであろう。ちなみに、「Nのあまり」の名詞の前には「その」を付加することが自然であるように思われる。

123) a．彼女は聴衆の前で失敗してしまい、その恥ずかしさのあまり泣き出してしまった。

?b．彼女は聴衆の前で失敗してしまい、あまりのその恥ずかしさに泣き出してしまった。

124) a．合格の知らせを聞いて、彼はそのうれしさのあまり大声をあげてしまった。

?b．合格の知らせを聞いて、彼はあまりのそのうれしさに大声をあげてしまった。

なお、「あまりの不思議さに」「不思議さのあまり」は「不思議なことに」のように、「ことに」への移行がある程度可能であるが、「??働きすぎたことに」などは不自然である。また、

125) a．懐かしいことに、小学校の校舎は昔のままだった。

b．{懐かしさのあまり/あまりの懐かしさに}、涙が込み上げてきた。

のように「ことに」は事態の受け止め方はそれほど感情的ではないが、「あまり」を用いた場合は感情の吐露が非常に大きい。前者が事態描写本位であるのに対し、後者は心的描写に重点が置かれていることから、双方を入れ換えると不自然になってしまう。

126)?? a．懐かしいことに、涙が込み上げてきた。

??b．{懐かしさのあまり/あまりの懐かしさに}、小学校の校舎は昔のままだった。

なお、「懐かしい」の副詞修飾は「懐かしく思う」を除き、「懐かしくも」の形はない。

8．おわりに

文副詞のなかでも評価判断の副詞のなかでも、「情意」という観点から、「－くも」「－にも」の形式を中心にみてきた。「も」の本来もつところの取り立て的な性質が「情意」とどのような関わりをもつのか、という点からも多少の考察を行ったつもりである。また、「－ことに」、「Nのあまり」、「あまりのNに」の評価成分とも並行的であり、相補的ともいえる点を指摘した。「－くも」「－にも」「－ことに」「あまりのNに」「Nのあまり」の表現形式とその特徴をまとめてみると、次のようになる。

	品詞接続	文末叙述形式	意味的特徴	独立度
－くも、－にも	形容詞、形容動詞	完了事態	詠嘆的強調	強
～ことに	形容詞、形容動詞		結論的評価	強
N(の)あまり	名詞、動詞		結果・程度の強調	弱
あまりのNに	名詞		同	強

三者に共通する特徴としては、過去の結果事態についての言及であることから、「た」で終わる文が多い点である。また、疑問形式にならないこと、また後件に意志表現が来な

いことである。ただ、例文（⇒）のような結果要件とすれば、過去における意志決定も成立しうる。

127)??{偶然にも/偶然なことに/あまりの偶然さに・偶然のあまり}言葉も出ませんでしたか。

128)??今度の試験では、奇しくも満点をとろうと思っている。

129)??うれしいことに、来年海外に留学するつもりだ。 ⇒留学できることになった。

130)??あまりの暑さに、クーラーをとりつけよう。 ⇒とりつけることにした。

また、「－くも」「－にも」と「－ことに」は隣接関係にあるが、「あまりのNに」「Nのあまり」は、結果事態に比重がおかれ、前の二者とは使い方に違いが見られた。またここには語彙的な副詞から、副詞句へ、さらに副詞節への展開が見られる。同時にこれは文法化への展開過程でもある。節としての〈許容度〉は上図でいえば、下に行くにしたがってしだいに広くなっている。

近年、副詞の記述的研究は急速に深化してきた。が、なおも分析が手薄なところも多い。たとえば「どう考えても」などの比較的短い副詞節も意味機能的には評価の副詞類に充当するといったように、副詞として扱いうる語形、種類は多様を極めている。今回とりあげた用法もその重要な記述項目である。「も」の用法は多義的、多機能的であり、感情の微妙な色合いを映し出すところから、それらの意味を客観的見地から検証することは非常に困難である。「くも」「にも」の固定的な語彙と可変的な語彙の分別も依然として明確でないところが残った。それら間隙を埋める類似表現として、「－ことに」「Nのあまり」「あまりのNに」の用法などと関連付ける指導方法も考慮されてよいだろう。

なお、本稿は日本語教育における副詞研究の一部をなしている。

注１）副詞に「は」のついた成分、「おそらくは」「たまには」「まずは」「古くは」「遠くは」などについては田中（2000）で概説的な考察をおこなっている。

注２）西原（1991:72－74）では「後続する談話機能の予測」として「話者の判断」をあげ、さらに判断を「真偽」と「価値」に分類している。「評価」はこの後者に相当する。

注３）こうした評価形容詞成分の移動については田中（2000）でふれている。

注４）なお、「好きに」「だてに」などは一定の構文的要素をそなえているが、個別的な語彙とみなしてここでは立ち入らない。

好きに/好きでこんな商売をしているのではない。

だてに大学を出たわけじゃないんだ。

注５）これらのあるものは「願うべくは」「惜しむべくは」などの「べくは」の形と重複する。また文語的な「惜しむらくは」などの形も個別的には散見される。

注６）田中（2003）では「Nのあまり」は形式名詞を底名詞とする接続成分で、「～結果」「～あげく」「～すえ」などとともに「結果誘導」節として考察している。「あまりのNに」は文副詞として扱われている。

注７）「あまりの名詞で」の形も同様に理由・原因をあらわす。

今年の夏はあまりの暑さで、稲の生育もよくなかった。

今年の夏はあまりの暑さに、体調をこわしてしまった。
あまりの忙しさ[で]、手紙を書くひまもない。
あまりの忙しさ[に]、とうとう体を壊してしまった。

理由・原因をあらわす「で」格と「に」格の違いが見られる。前者は個々の環境、後者は自然的な発生を意味している。

例文出典：山中恒『新聞は戦争を美化せよ！』小学館、椎名麟三『神の道化師』、松本清張『神々の反乱』（上）文春文庫、吉村昭『メロンと鳩』講談社文庫、立松和平『光の雨』新潮文庫など。

【参考文献】

秋元美晴他1987『外国人のための日本語例文問題シリーズ1　副詞』　荒竹出版
工藤　浩2000「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』ひつじ書房
グループ・ジャマシイ1998『日本語文型辞典』くろしお出版
森本順子1994「話し手の主観を表す副詞について」くろしお出版
田中　寛2000「副詞・副詞句に付着せる「は」について」（『日本語の視界』私家版収録）
田中　寛2000「〈こと〉・〈の〉節を受ける形容詞述語文」『言語教育研究論叢』17号　大東文化大学語学教育研究所
つくば言語文化フォーラム1995『「も」の言語学』　ひつじ書房
中右　実1980「文副詞の比較」　国広哲弥編『日英語比較講座第2巻文法』　大修館書店
西川真理子1997「日本語の評価的文副詞についての一考察―『も型』から『ことに型』へ―」『甲子園大学紀要栄養学部編』24号(A)
西原鈴子1991「副詞の意味機能」日本語教育指導参考書19『副詞の意味と用法』　国立国語研究所大蔵省印刷局
仁田義雄2002『副詞的表現の諸相』くろしお出版
林　史典他編著1992『15万例文・成句現代国語用例辞典』　教育社
飛田良人・浅田秀子他編1994『現代副詞用法辞典』東京堂
森田良行1989『日本語をみがく小辞典　形容詞・副詞編』　講談社新書
森本順子1994『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
矢澤真人2001「副詞的修飾の諸相」　仁田義雄ほか『文の骨格』日本語の文法1　岩波書店所収
谷部弘子1986「話し手の評価を担う形容詞」『日本語学』5-11　明治書院
盧　賢珠1998「文副詞としての〈も〉の考察―〈幸い〉と〈幸いにも〉を中心に―」『岡大国文論稿』26号 岡山大学法文学部言語・国語・国文学研究室